

横浜市立大学附属2病院・医学部再整備計画

横浜市立大学の「附属病院」および「附属市民総合医療センター」、そして医学部は、大学病院として高度で先進的な医療の提供や市民の生活を守るための救急医療、災害時医療等を提供するとともに、質の高い医療人材の養成・輩出、医療の研究・開発など、市民の健康と命を支える「最後の砦」として様々な役割を果たしています。

一方、附属病院や附属市民総合医療センターの救急棟（高度救命救急センター等）、並びに医学部校舎は、建設から30年以上が経過し、狭あい化・老朽化が進んでおり、先端医療機器の導入や学生教育等に支障をきたす等の課題が生じています。

こうした課題を抜本的に解決し、刻々と変化している医療を取り巻く環境へも適切に対応しつつ、将来にわたり市民の健康と命を支える「最後の砦」としての存在であり続けるために、現在、横浜市立大学と横浜市が一体となって、附属2病院・医学部等の再整備計画について検討を進めています。

これまでに、横浜市立大学が「再整備構想案（令和元年度）」を策定し、横浜市が市民意見を募集した上で「再整備構想（令和2年度）」を策定しました。令和3年度からは、「再整備基本計画（令和5年度策定目標）」の検討を行っています。

現時点では、「最高の医療・医学研究・人材育成拠点へ～横浜の丘からみらいへ発信し続ける大学」を全体ビジョンとして掲げ、附属病院と附属市民総合医療センターを統合して1,000床程度の大学附属病院を、医学部・研究施設等と併せて一体的に移転再整備を行う事業計画としており、根岸住宅地区跡地が再整備の最有力候補地となっています。

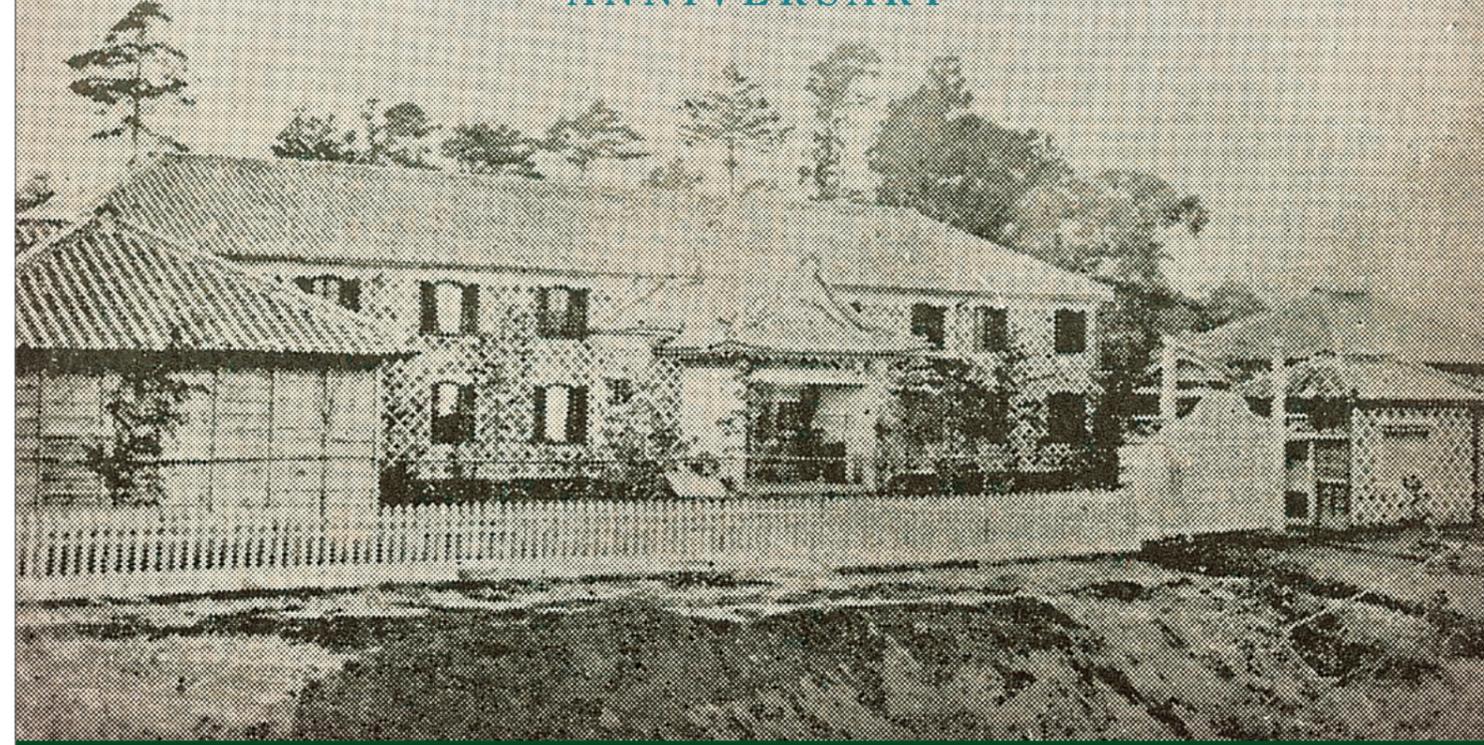
また、「再整備基本計画」は、単なる施設の移転再整備の検討ではなく、未来の市大附属病院・市大医学部等の医系の方針・在り方を示した、総合的な「将来計画」として検討を進めています。

今回計画している、同規模の大学附属病院を対等に統合し再整備することは、おそらく日本で初となることであり、構想から、計画、設計、工事を経て、新病院・新医学部等が完成するまでには、長い歳月を必要とする事業となります。

再整備候補地の動向も踏まえながら、新病院等の機能について本格的な検討を行い、横浜の医療の充実に向け再整備事業に取り組んでいきます。



YOKOHAMA CITY UNIVERSITY HOSPITAL
150th
ANNIVERSARY



横浜市立大学附属2病院・医学部 150周年記念

横浜市立大学創立100周年

横浜市立大学は5学部、6研究科を有する総合大学ですが、教育機関としての歴史は、1882（明治15）年に設立された横浜商法学校まで遡ります。その後、1928（昭和3）年に横浜市立横浜商業専門学校（Y専）が設立、1944（昭和19）年設立の横浜市立医学専門学校（後の横浜医科大学）と統合して、新制大学として歩み続けてきました。

大学創立100周年事業は1928年の横浜市立横浜商業専門学校の設立を創立年とし、2028年の創立100周年に向けて、学生・教職員・卒業生だけでなく横浜市民の皆さまと共に祝い、その次の100年も発展し続けるための記念事業プロジェクトに取り組んでいますので、皆様にもそのメンバーとしてご協力・ご支援を賜りますようお願い申し上げます。



伝統と革新の、その先へ
1928 - 2028

周年ロゴマーク



横浜市立大学附属2病院と医学部は150周年を迎えました。

2021年に横浜市立大学の2つの附属病院と医学部は、
そのルーツから数えて150年という節目の年を迎えました。

横浜市立大学にとって歴史的なこの瞬間に、期せずして人類にとって未曾有の試練が襲いました。

Covid-19—新型コロナウイルスの爆発的感染拡大です。

この大きな試練に横浜市立大学は敢然と立ち向かい、

患者の治療に、そして未知のウイルスの研究に、

「最後の砦」としてその使命を胸に今もなお、挑み続けています。

そしてその使命に我々を突き動かすものは、150年の歴史に刻まれた遺伝子です。

150年の節目に我々はそれを今一度確認し、未来へさらなる発展を誓います。

MESSAGE



横浜市立大学
理事長

小山内 いづ美

横浜市立大学には2つの源流があります。一つは現在の国際商学部のルーツとして、1928年に設立された「横浜市立横浜商業専門学校(通称:Y専)」です。横浜開港以降、外国とのビジネスにおいて対等に渡り合うため、商業の理論と実践を担う人材を多く輩出することを目指した専門学校です。

そしてもう一つの本学のルーツが、横浜の医療の中心を担う「横浜仮病院」でした。この「横浜仮病院」は、日本で2番目の西洋式病院として開院以来、これまで永々と横浜市民の命を守り続け、現在の横浜市立大学附属病院・附属市民総合医療センター・医学部へと発展してきました。

病院は、開港によりもたらされた最新の西洋医学の知識を学び、実践し広める場として、また、横浜を襲った伝染病治療の中心として、さらには関東大震災の時には率先して被災者を受け入れる災害医療の拠点となるなど、その時代が求める必要な医療を市民の皆さまに提供し続けてきました。時宜に叶う使命を担うべく、先人たちの

志を引き継ぎ、今もその強い使命感と行動は変わりません。世界を一変させた新型コロナウイルスのパンデミックに際しては、2020年2月横浜港に多くの感染者を乗せた客船が接岸した際、船内の重症患者を真っ先に受け入れたのは、本学の附属2病院でした。その後も多くの重症者の治療にあたるとともに、未知のウイルスと闘うため、数々の世界的研究成果を発信し続けてきました。本学の医療従事者、研究者、職員は、この未曾有の感染症の流行にあって一丸となり、敢然と立ち向かいその使命を果たしました。このことは、さかのぼること明治10年(1877年)のコレラの大流行の際の本学の働きと重なります。当時、横浜仮病院から県立の「十全医院」となっていた我々の病院は、多くのコレラ患者を収容し、中心となって活躍していたシモンズ医師により、市内の医師へ感染対策の啓発を行ったり、海港検疫や様々な防疫にも取組み、市中の感染拡大防止や治療にたいへん重要な役割を担っていたことが記録に残されています。「市民の命を守る最後の砦」としての病院の使命を表わすDNAが、今もなお本学の職員の中に脈々と息づいているのです。

そして、現在の附属病院と附属市民総合医療センター、さらに医学部の再整備の計画が本格化しています。この150年という歴史を礎に、診療・教育・研究のあらゆる面で横浜から世界へと成果を役立てさらなる発展、進化を目指しています。横浜開港の地のそば、根岸の丘に新たな医療拠点のランドマークが創設される計画です。150年間の市民の皆さまからいただいた様々な応援やご支援を糧に、これからは横浜市立大学は先人からの志を活かし、世界をリードする大学としてさらなる発展を願い、ここに実現を誓いたいと思います。

横浜市立大学附属2病院・医学部の沿革

- 1871年(明治4年)4月20日 ● 早矢仕有的氏の首唱による有志の寄金をもとに、元弁天通(現中区北仲通6丁目)に「仮病院」を開設。
● 9月に近隣の失火により類焼閉院。
- 1872年(明治5年)7月 ● 仮病院焼失のため、大田町6丁目に代替施設「横浜病院」を開設。
- 1872年(明治5年)10月 ● 野毛老松町に場所を移し「横浜共立病院」と改称。
- 1874年(明治7年)2月 ● 横浜共立病院を県立とし「十全医院」と改称。
- 1874年(明治7年)8月 ● 天然痘流行により予防接種業務の全てを十全医院に移管し、県下の予防接種本局として証明書を発行。
- 1874年(明治7年)秋 ● 十全医院で初めて医学研究のための人体解剖を行う。
- 1877年(明治10年)秋 ● コレラ流行の対策として、横浜市内の医師を十全医院に集め、シモンズが数回にわたる講義を実施。
- 1891年(明治24年)4月1日 ● 神奈川県十全医院を横浜市に移管し「横浜市十全医院」と改称。建物の増改築を行う。
- 1898年(明治31年)5月12日 ● 看護婦養成所を開設。ナイチンゲール生誕喜寿に因む。
- 1905年(明治38年)6月 ● 医院処務規定を改め、医務・薬剤・事務の3局に体系化。
- 1923年(大正12年)9月1日 ● 関東大震災のため全焼。隣接の平沼久三郎氏の好意により邸宅を借りて仮診療を実施し、被災者の救護を行う。
- 1923年(大正12年)11月 ● 香港より寄贈されたバラック病棟の資材で34床の病舎開設。
- 1924年(大正13年)6月23日 ● 南吉田町(現南区浦舟町)旧万治病院跡地に応急病院として移転し業務開始。
- 1927年(昭和2年)4月 ● 病棟建設開始(~昭和14年)。
- 1928年(昭和3年) ● 「横浜市立横浜商業専門学校(Y専)」設立。 ※横浜市立大学創立年
- 1944年(昭和19年)4月 ● 「横浜市立医学専門学校」設立。それに伴い「横浜市立医学専門学校附属十全病院」と改称。
- 1948年(昭和23年)11月 ● 隣接の「横浜同愛記念病院」を買収合併し附属病院とした。
- 1949年(昭和24年)4月 ● 新制大学として「横浜市立大学」設立(商学部)。
● 横浜市立医学専門学校が「横浜医科大学」に昇格。「横浜医科大学病院」と改称。
- 1952年(昭和27年)4月 ● 横浜市立大学医学部の設置に伴い「横浜市立大学病院」と改称。
- 1954年(昭和29年)4月 ● 「横浜市立大学医学部病院」と改称。
- 1961年(昭和36年)4月 ● 大学院医学研究科(博士課程)設置。
- 1966年(昭和41年)4月 ● 「横浜市立高等看護学校」「横浜市立准看護学校」設立。
- 1972年(昭和47年)11月1日 ● 横浜市立大学病院100周年記念学術講演会開催。
- 1981年(昭和56年)12月 ● 医学部移転先を金沢区金沢埋立3号地に決定。
- 1987年(昭和62年)4月 ● 金沢区に医学部校舎開校。
- 1990年(平成2年)1月 ● 救命救急センター稼働開始(浦舟町)。
- 1991年(平成3年)7月 ● 「横浜市立大学医学部附属病院」開院。浦舟町の附属病院を「横浜市立大学医学部附属浦舟病院」に改称。
- 1995年(平成7年)4月 ● 「横浜市立大学看護短期学部」設置。
- 1998年(平成10年)4月 ● 大学院医学研究科(医学科専攻・修士課程)設置。
- 2000年(平成12年)1月 ● 「横浜市立大学医学部附属市民総合医療センター」開院。
- 2005年(平成17年)4月 ● 「公立大学法人横浜市立大学」発足。「横浜市立大学附属病院」に改称。
● 「横浜市立大学附属市民総合医療センター」に改称。医学部看護学科を設置。
- 2010年(平成22年)4月 ● 大学院医学研究科看護学専攻(修士課程)設置。
- 2018年(平成30年)4月 ● 大学院医学研究科看護学専攻(博士課程)設置。
- 2020年(令和2年)2月 ● 新型コロナウイルス感染症の流行に対して、初期から横浜市内の中核的医療機関として重症患者の治療を実施。
- 2021年(令和3年)4月 ● 横浜市立大学病院150周年。
- 2022年(令和4年)10月 ● 横浜市立大学病院150周年記念式典開催。

写真で見る 横浜市立大学附属2病院・ 医学部の歩み

1871 明治4年



横浜仮病院と 早矢仕有的氏

早矢仕有的氏の呼びかけによる寄附をもとに、元弁天通(現中区北仲通6丁目)に「横浜仮病院」を開設。当時、長崎に次ぐ2番目の西洋式病院だった。ちなみに早矢仕氏は医師でありながら書店「丸善」の創立者でもあり、「ハヤシライス」の生みの親とも言われる実業家。



1874

明治7年

十全医院の誕生

横浜仮病院はその後横浜共立病院と名称を変え野毛山に移転、さらに県立に移管されたと同時に「十全医院」に改称された。野毛山では貧しい市民への治療「貧民施療」が行われていた。また、十全医院では天然痘の予防接種や、コレラの大流行の際には治療や防疫の中心的役割を担った。

1898

明治31年

横浜市立十全看護婦養成所を開設

ナイチンゲールの誕生日にちなんで、5月12日に「横浜市立十全看護婦養成所」が開設された。第一回の入所者は6名だった。当時の看護教育は医師にゆだねられており、病院における看護婦の業務は主に診療の補助であった。



1923

大正12年

関東大震災発生

写真/横浜開港資料館所蔵

横浜地域は震度7ともいわれる震災の発生により、十全医院は全焼した。当日の入院患者は129名、勤務していた職員等は150数名とも言われ、余震の続く中、職員の決死の避難誘導により、1名の死傷者も出さずに院外に避難したという。その後は平沼氏邸を仮病舎として診療を再開、また市内全域へ医療救護班を派遣する等被災者の救護を行った。



1944

昭和19年

横浜市立医学専門学校附属 十全病院に

1944年に十全医院を母体とする「横浜市立医学専門学校」が設立され、本学医学部のルーツとなる。太平洋戦争中に軍医速成のため、医科大学より修学期間の短い医学専門学校が多く設置されたが、横浜医専もそのひとつ。十全医院はその医専の附属病院となった。



1949

昭和24年

横浜市立医学専門学校が 横浜医科大学となり、横浜医科大学病院に

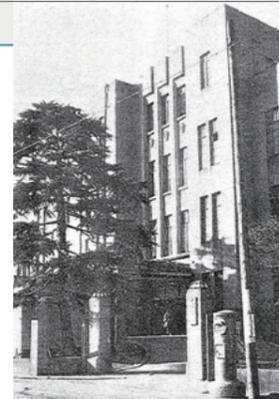
戦後の医学教育改革が進められる中、厳しい審査を経て横浜医専は大学に昇格。1947年(昭和22年)に「横浜医科大学予科」として現在の金沢区六浦に開校。1949年(昭和24年)には「横浜医科大学」として認可された。

1952

昭和27年

横浜市立大学 医学部が設置、 「横浜市立大学病院」に

旧商学部の起源である「横浜市立横浜商業専門学校(Y専)」が大学に昇格するとともに、横浜医科大学と統合、「横浜市立大学」となる。ここに横浜市立大学医学部が誕生し、病院も「横浜市立大学病院」に。



1952

昭和27年

「横浜市看護婦養成所」として、 看護婦科、准看護婦科が発足

1952年(昭和27年)4月、「横浜市看護婦養成所」が発足、翌年には、「横浜市立高等看護学院」に改称。当時の定員は、看護婦科15名、准看護婦科30人だった。1966年(昭和41年)には、「横浜市立高等看護学校」に、1971年(昭和46年)には「横浜市立大学医学部付属高等看護学校」となった。



1954 昭和29年

「横浜市立大学 医学部病院」に改称

1967年には第1新館(収容300床)、1972年には第2新館(収容700床)を相次いで竣工。



1987 昭和62年

金沢区に 医学部新校舎設置

大学院設置のための研究設備の充実や校舎の増設が行われていたが、狭小化や老朽化のため、金沢区の埋め立て地への移転を決定。1987年(昭和62年)に医学部新校舎が金沢区福浦に移転した。また、4年後には600床の附属病院も完成。



1991 平成3年

医学部附属病院を 開院

2000

平成12年

横浜市立大学附属市民総合医療センター開院

医学部の福浦移転に伴い名称を「横浜市立大学医学部附属福浦舟病院」として運営していた同病院は2000年(平成12年)に解体、新たに700床規模の「横浜市立大学医学部附属市民総合医療センター」として、高度救命救急センターを擁する病院に生まれ変わる。



2011

平成23年

東日本大震災発生

附属病院および附属市民総合医療センターはともに「災害拠点病院」として、横浜市内の災害時医療の中心を担うとともに、震災直後から被災地に医療救護班を派遣、現地での医療救護活動を積極的に行った。



2020

令和2年

新型コロナウイルス流行

2020年2月、横浜港に接岸したクルーズ船「ダイヤモンドプリンセス号」で多くの新型コロナウイルス陽性患者が確認され、その多くの患者を横浜市立大学附属2病院で受け入れた。以降、神奈川県における中心的な治療施設として、重症・中等症患者の受け入れを積極的に行った。

横浜市立大学附属病院

674床

一般／612床 精神／26床
結核／16床 臨床試験専用／20床

平成3(1991)年7月に浦舟町から移転・開院(初代病院長:澤木修二)した現在の横浜市立大学附属病院は、高度急性期病院及び特定機能病院として、高度でかつ安全な医療を提供するとともに、医療技術の開発や質の高い医療人材の育成を行う神奈川県で唯一の公的医療機関附属病院です。

厚生労働省認定の「地域がん診療連携拠点病院(高度型)」、横浜市「小児がん連携病院」「認知症疾患医療センター」、神奈川県認定「エイズ治療中核拠点病院」「災害拠点病院」「肝疾患診療連携拠点病院」「神奈川県難病医療連携拠点病院」、WHO(世界保健機構)認定「赤ちゃんにやさしい病院(Baby Friendly Hospital)」など、各診療領域で高度先進かつ総合的診療機能を持った病院として診療を実施しています。



附属病院(金沢区福浦)

また、日々進歩するロボット手術や内視鏡手術に加え、がんゲノム診断による治療の可能性の拡大や遺伝子診療科による先天性疾患の診断、未診断疾患イニシアチブ事業(IRUD)によるこれまで診断がついていない重症・難治性疾患の診断など様々な新しい医療を推進しています。

横浜市立大学附属 市民総合医療センター

726床

一般／676床 精神／50床

平成3(1991)年の移転に伴い、従前の病院は横浜市立大学医学部附属浦舟病院に改称し、その後の再整備事業等を経て、平成17(2005)年の公立大学法人化時に横浜市立大学附属市民総合医療センターに改称、現在に至ります。

「市民の皆様信頼され『地域医療最後の砦』となる病院を創造する」ことを基本理念として、「災害拠点病院」「高度救命救急センター」「総合周産期母子医療センター」「精神科救急医療基幹施設」「肝疾患診療連携拠点病院」「地域がん診療連携拠点病院」などの役割を担う地域密着型の病院であり、患者さんの意思を尊重し、安全・安心な医療を提供しています。



附属市民総合医療センター(南区浦舟町)

令和2(2020)年1月には、日本医療機能評価機構の「一般病院3」の認定を神奈川県内で初めて、特定機能病院以外では全国で初めて受けました。また、「遺伝子診療科」「がんゲノム診療科」の新設や、大型かつ最新鋭の医療機器にも対応できる手術室を含む計3室の増設及び手術支援ロボットの2台同時導入など、高度急性期機能の向上に取り組んでいます。

明治時代の草創期における市大病院が、コレラ流行を抑えることに力を尽くしたように、令和2(2020)年2月の横浜港へのクルーズ船着岸以降、国内外での新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の蔓延に対応しました。

附属病院では、人工呼吸器の導入を必要とする重症例や神奈川県内における周産期、透析を必要とするコロナ患者の受入医療機関として、また、附属市民総合医療センターでは、体外式膜型人工肺(ECMO)を必要とする重症例や小児、周産期、精神疾患のコロナ患者受入医療機関としての役割を担い続けています。

横浜市立大学医学部 (医学科・看護学科)

福浦キャンパス

横浜市立大学医学部は、地域社会や国内外で活躍できる、医学・看護を担う人材育成と、創造的研究により社会の発展と人類の福祉に寄与する事を使命としています。医学部には1学年90名定員の医学科と1学年100名定員の看護学科、及び定員131名の医学研究科があります。

医学科の目標は、豊かな人間性と深い知性を有し、確固たる倫理観に基づく総合的判断力を持ち、生涯にわたって研鑽を続け、医学・医療を通して人類の福祉に貢献する人材の育成です。医学科の特徴としては、シミュレーターの活用等による医療体験教育の充実や研究実習(リサーチ・クラークシップ)と参加型臨床実習(クリニカル・クラークシップ)の推進などがあります。

看護学科の目標は、高い教養と専門性だけでなく、他者の苦しみや痛み、喜びも理解する事ができるような豊かな人間力を持ち、未来の看護をけん引できるリーダーの育成を目指し、取り組んでいます。看護学科の特徴としては、エビデンスに裏打ちされた実践力を養うカリキュラムやクラス担任制をはじめとするきめ細やかな指導体制などがあります。

1年次は金沢八景キャンパスで共通教養教育を学び、福浦キャンパスにて2年次以上の専門教育を展開しており、高学年では附属する2つの病院とも連携し人材育成に大学全体で取り組んでいます。また、国家試験対策も充実していて、直近の5年間平均の合格率は医師国家試験97.2%、看護師国家試験99.0%と高い実績を維持しています。

さらに、コロナ前は34名と多くの学生が海外へ留学しており、既存のYCUのネットワークを生かし世界トップレベルの大学・機関への派遣プログラムを開拓しています。コロナ禍においてもオンラインで留学体験プログラムを積極的に展開しています。

医学部の源流は150年前(明治4年)に設立された横浜仮病院まで遡ります。横浜市立大学病院は、横浜市が多くの困難を乗り越える歴史と並行し、看護学科の前身である看護婦養成所が明治31年に設立され、医学科の前身である横浜市立医学専門学校が昭和19年に設立されました。このように長い歴史と多くの市民の方に支えられ今日の横浜市立大学医学部へと発展を続けてきています。



福浦キャンパス(金沢区福浦)